

《冬山偵察行報告》

昭和36年10月30日～11月5日

唐沢 東沢 霞沢 各隊の記録

信州大学山岳会

松本山岳部

伊那山岳部

MEMBER

唐沢隊 (6名)

後藤紀彦 中村和夫 松尾武久 (以上松本)
葛西正美 出島五郎 新 (以上伊那)

東沢隊 (2名)

小谷雅宣 (松本) 寺田雅治 (伊那)

霞沢隊 (4名)

主計勤也 (伊那)
西郡光昭 真野孝一 田中正治 (松本)

はじめに

冬山合宿は松本と伊那の両山岳部が合同して行うと決まったのは10月上旬。同時に唐沢岳より霞沢岳への縦走案が採択された。この案は大分前から我々の間で問題になっていたもので、何時もすぐ西にそびえる山々であってみれば、全山縦走してみたい、と願うのは自然の動きであらう。だが何分、日数とメンバーの点で現在まで試みるにいたらなかった。我部のこの山脈に於ける積雪期の記録はアプローチの短かさ、気やすさのため非常に多い。30年12月の餓鬼・燕。34年12月の大滝・蝶。35年3月の常念より燕。35年11月の餓鬼・大滝をはじめとして、5、6月の残雪期の記録にいたっては枚挙にいとまがない。この様な記録の上に立った気安さと、今春の事故より反省された基礎技術の練習と余裕を持った行動のため、更に20余名のpartyが多くの日数をかけて各種のルートから安全にサポートを出来、積線に出れば冬山の各技術の習得に多い。等のあらゆる点から考えても現在の我々に比べてもものと言えらる。

文理山岳部と医山岳部と合同した松本山岳部の第一回の合宿が東沢乗越の合宿であったこと、そして今回の松本と伊那の合同が舞台を同じくする所で行われること。に我々はある意義を認めてよいと思う。この報告は冬山合宿の問題箇所へ偵察に入った記録であるが、各隊の仕事を列記してみる。

○唐沢隊

高瀬川より唐沢岳に取りつくルートの決定。

○東沢隊

唐沢岳に直接取りつくことが不可能な場合を考
え、中房川及び東沢を調査。
北燕・餓鬼岳の岩峰群の偵察。

○霞沢隊

蝶・霞沢岳間の標式つけ。
頂上からの人夫小屋への尾根と、沢渡への尾根
の選択。

以上の如く任を決めた。

未知のルートをややく降路にとった事は大いに反省の余地がある。幸雨も降らず一晩中たき火をかこんでの寒い一夜を明かす。

11月1日(晴のち曇)

ビバーク地点—餓鬼岳—東沢乗越—東沢—テント
無雪期でさえ迷いやすい尾根をたどってガキ小屋につく。冬山か思いやられる。距離の割に起伏と悪路のため時間のかかる所だ。餓鬼の南峰は下の道を通る。冬の記録も殆んど下を通っているので大丈夫だろう。途中で東沢隊に会い、歓談。明日合流する事を約して別かれる。すっかり思わく違いの東沢の高捲き道と倒木フウウウってテントに戻る。

11月2日(晴)

好天だが昨日の疲れのため沈澱する。偵察の結果として西尾根2,200mのコルに一の沢側からルートをさかす事に決定。

11月3日(小雨時々曇)

悪天のため沈澱。中村。新下山。

11月4日(くもり時々雨)

沈澱。後藤。小谷下山。

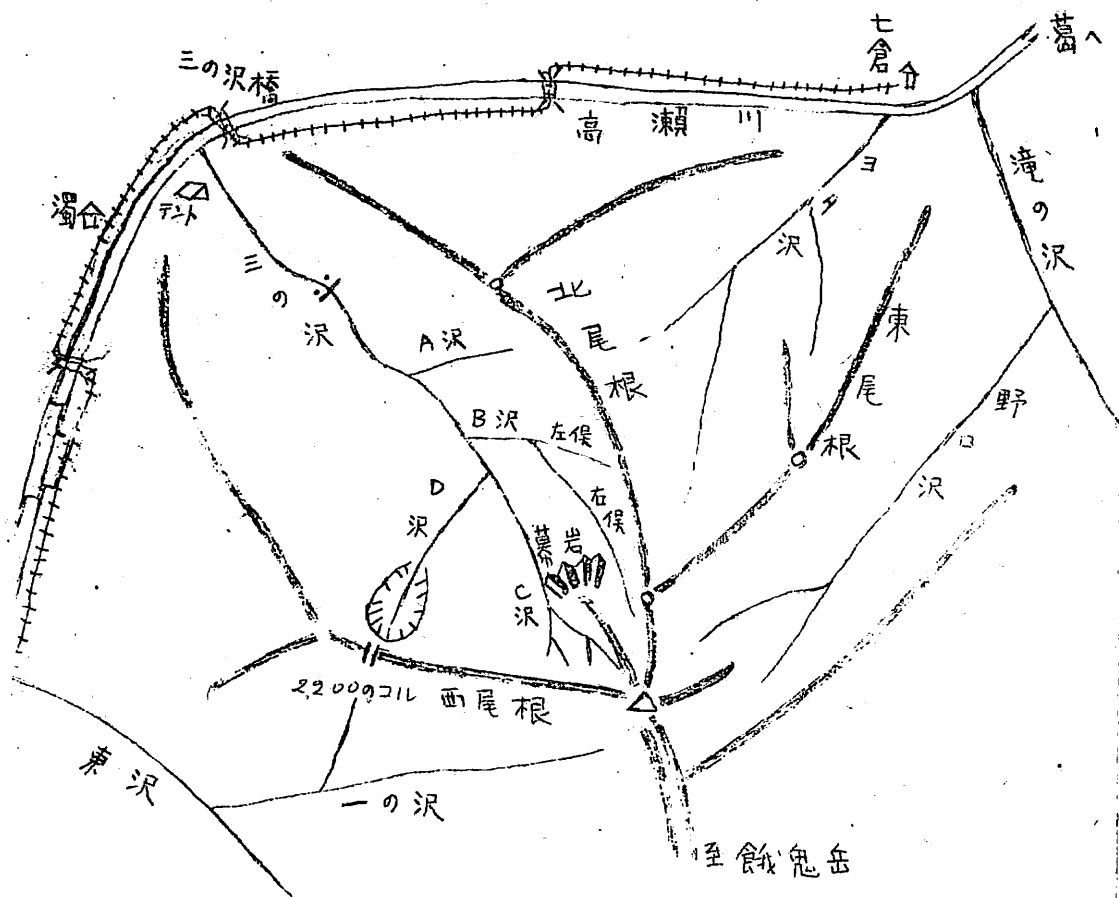
11月5日(晴)

テント—東沢—一の沢—2,200のコル—一の沢—テント

一の沢は平凡な沢。沢の屈曲部よりコルにつき上げているカレ沢の右手の尾根にルートをとる。傾斜の強い事。Bushのわおらわしい事下部が雪崩の考えられる事を除けば格好のルート。思いの外短時間(?)
ルート図参照。

11月6日(晴)

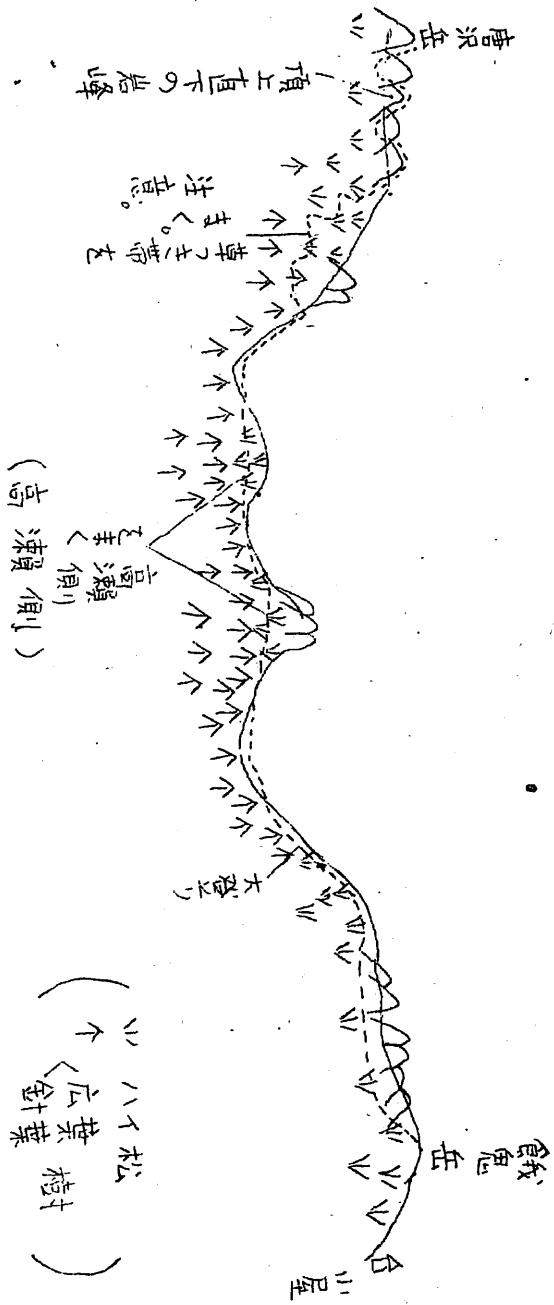
テント—葛—大町—松本
全員下山。下界はまだ秋も最中だ。



<唐沢岳概観図>

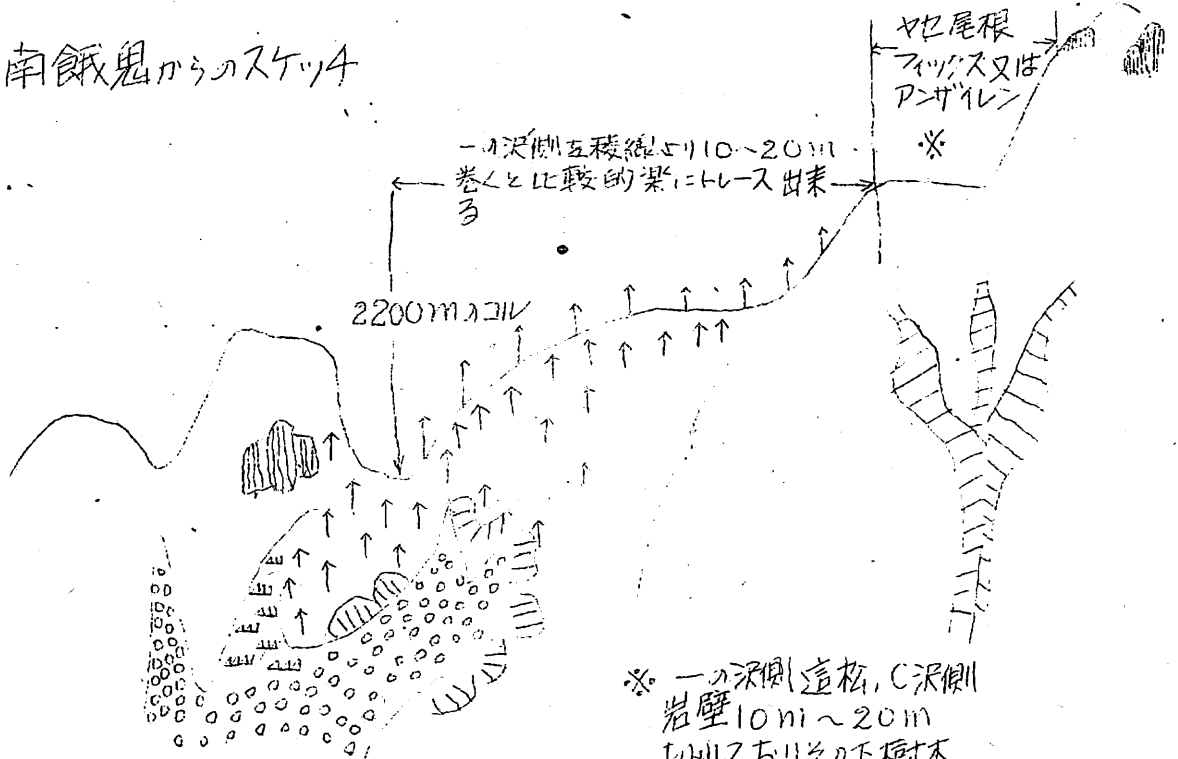
(岳人146号より)

唐沢岳・餓鬼岳間ルート



曾沢岳西尾根

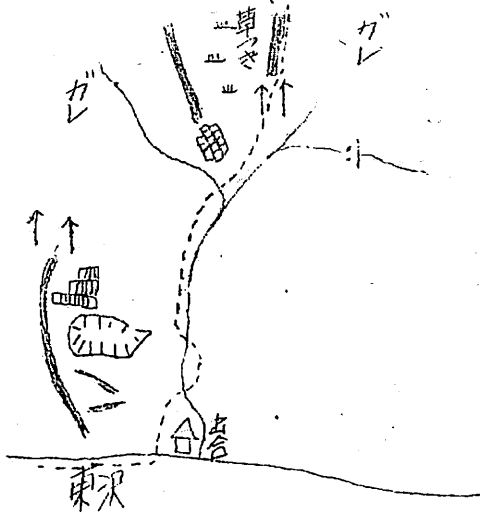
○ 南飯鬼からのスケッチ



2200mのツルまでナタ目5~10m
毎. 標識10m毎につけた

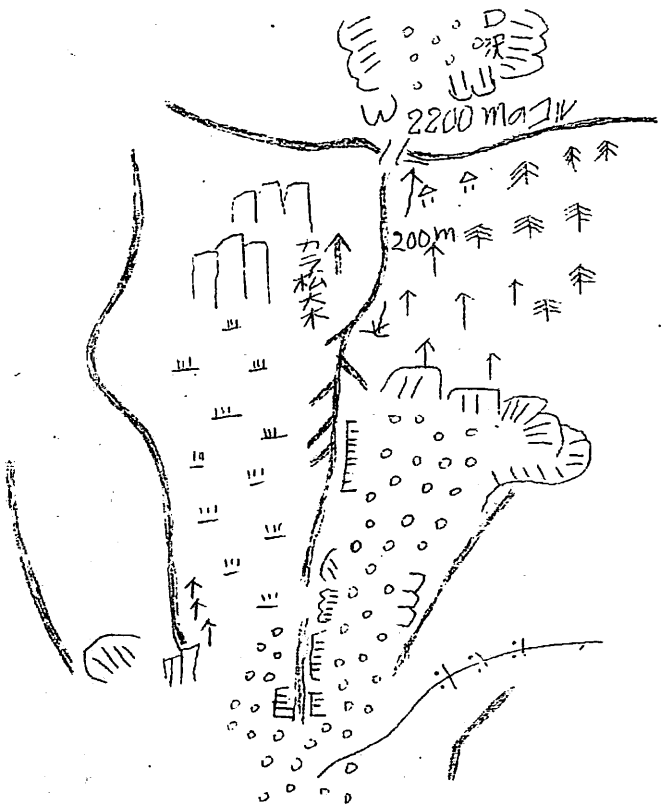
※ 一の沢側 遠松, C沢側
岩壁10m~20m
ツルに下りて下樹木

○ 一の沢下部



11月5日の記録

出発 6.35
出合 8.05 - 8.10
2200mのツル 10.30 - 11.35
イゼル上部 12.40 - 12.50
出合 1.30 - 1.50
帰幕 3.25



東沢乗越隊 寺田 小谷

1961.10.30~11.2

10月30日 天候 ◎一①

松本 ~~====~~ 有明 \equiv 中房 (9:35~40) \equiv 中房川 \equiv 東沢乗越
(14:50)

唐沢隊と共に一番の電車で有明へ行ったが、バスの時間まで一時間半程待たされてしまった。やはり出発前に時間を調べる必要のある事を痛感した。

さて、中房川には温泉の建築物の間を通り抜け河原に出る。そのまま右岸を少し行くと野天風呂がある。何の変化もない河原を進んで行くと左手に一本の沢が流れ込んでいる。そのすこし上流で、ぬれていて気味の悪い丸木橋を渡り左岸へ。そこからしばらく夏道がはっきりとついている。5万分の1の地図の中房川の中の字のあたりに砂防ダムがあり、その付近で道がくずれ落ちていたため、二人で大きな石を水中に沈め中洲に渡し、少し上流で左岸へもどる。その付近で川は大きく左へまがり、しばらくケルンに導かれて行くと、古ぼけた指導標が立っており、そこから左岸の尾根のジグザグの道を登り森林帯中の道を行くと、右側から一本の沢が出てくる。それを越えて行く。上には資材運搬用と思われる索道が見える。しばらく森林中の道を行くと、二つに道が分かれる。我々は右の道をとったため途中で道が消えてしまい、急な沢を下降する事となったが、左を行けば容易に河原へおりられると思われる。そこからはケルンに導かれて行く。しばらく行くと右方の大きなカレカがみえる。左方には沢が一本落ちこんでいる。真中の沢の左岸に大きなケルンが積んであり、その尾根に道がついていたものと思われるが、崩れ落ちていて道がなく、少し沢通しに登り、沢が左折するあたりから夏道に出る。ここから乗越まではジグザグの単調な道で、昔の高い草の間を通っている。途中で一つ右側の沢へうつり、

しばらく行くとクマザサ帯に入る。すくりに乗越だ。
10月31日 天候 6:00☉ 9:00☉ 12:00☉ 15:00☉

東沢乗越(8:20) — 北燕 — 燕岳(10:45~11:10) —

東沢乗越(13:00頃?)

朝6時頃起床するも雨のため出発をしばらく見合せていたら雨が止んだので出発する。しばらく森林帯の中の道で晴れていても見晴らしはよくなさそう。冬はラッセルで"シゴ"かれそう。30分程も行くと高さ15m位もありそうな露岩がある。そのあたりからハイマツ帯となる。ハイマツ帯を通り抜け下方に岳樺の林を見ながら信州側をまわす。尾根を反対側へ越える。その間2,3の岳樺がある。そこからインセル状の尾根を登り、右側にかしを見ながらハイマツ帯の切れたすぐ横の草つきの中の道をジグザグに登るとカレの上に出る。すぐ上は稜線だ。

このあたりも冬になるとナダレの出そうな所だ。そこから四個ほどの岩峰を通りすぎると、信州側のハイマツが切れ、眼前に巨大な岩峰がひかえている。夏道は岩峰の基部より下の方を通過している。そのまき道を通り、再び稜線へ出て、信州側のハイマツのつけ根あたりを通り、しばらく行くと燕の頂上である。帰りは岩峰をすべて登って見たら、ほんのわずかの距離で"あったか"1時間かかった。

霧雨のために寒く急いでテントへ帰る。

北燕から燕の間の信州側の捲き道は、草つきの中に開かれたもので、岩峰基部からの傾斜も30°以上あり、雪が積れば"ナダレ"に好都合の斜面のように思われる。しかし岩峰を越えるとなると、ザイルのフックも必要な箇所も出てくるように思われる。とにかく相当厳しいArbeitであると思う。高瀬川側は冬にはクラストしているとは思われるが、斜面が急なため不可能のようだ。

11月1日 天候 6:00① 9:00○ 12:00○ 15:00○

東沢乗越(7:40) — 東沢岳(8:20) — 餓鬼岳(11:35~12:35)
— 東沢乗越(15:30)

東沢岳までは森林中の道でピーク直下に少しばかり岩が露出している。これを下りしばらく森林中を行く。これを抜けると連続して5つの岩山がある。岩山の左右はハイ松が密生している。岩山を通り抜けるとまた森林帯に入る。それを抜けると南餓鬼の大岩山の基部に達する。そこからは岩登りを避けて左の高瀬川側の捲き道に入る。森林帯中の道を所々に露岩をみなから進む。南餓鬼を捲き終え稜線に出る。しばらく岩の道を進む。所々に針金やハンゴ等がある。そこを通り抜けまた高瀬川側を捲く道に入る。再び稜線に出てしばらく行くと餓鬼の小屋につく。小屋から頂上はすぐ目の前だ。

11月2日 天候 9:00① 12:00① 15:00①

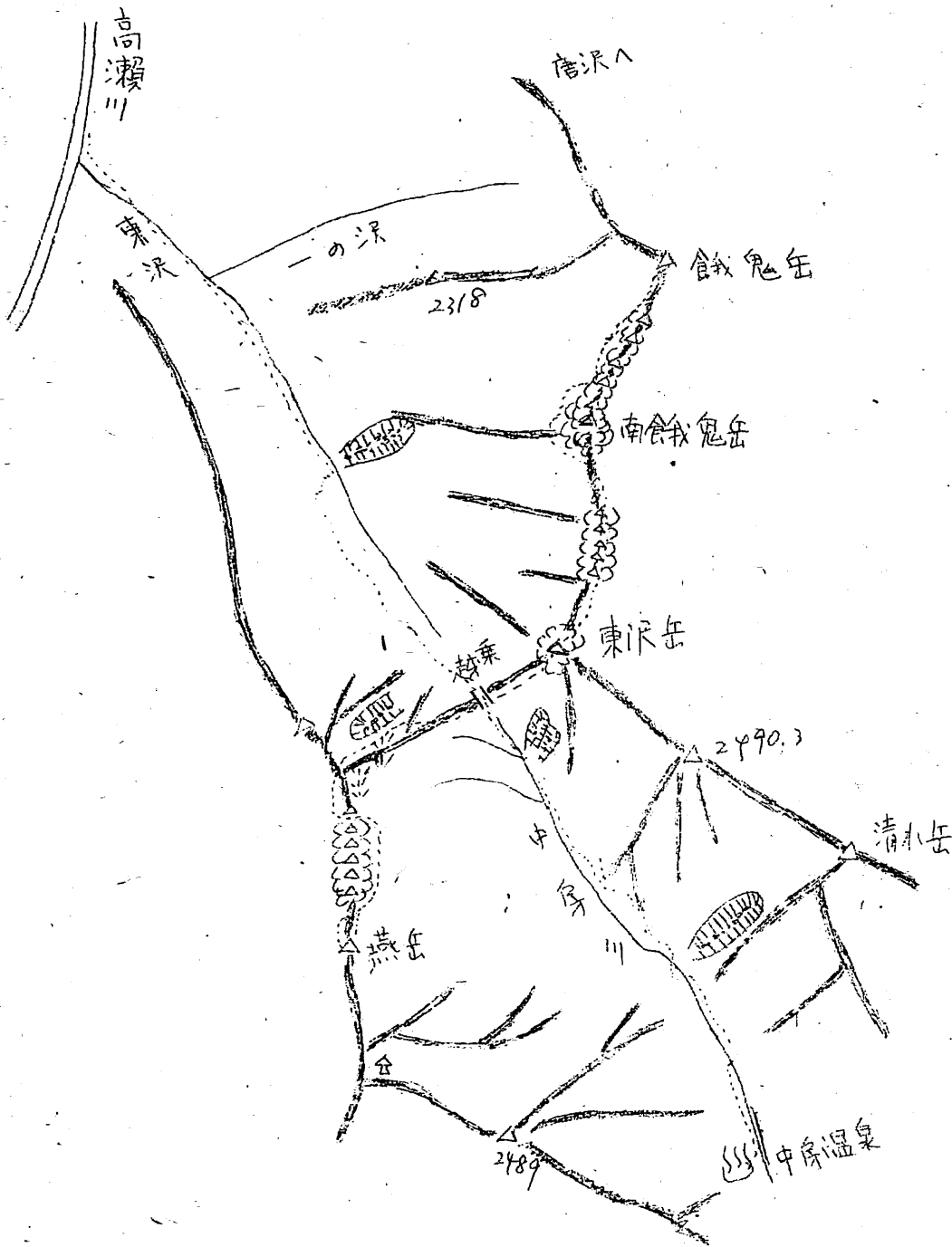
東沢乗越(9:00) — 一の沢出合(11:20~13:10) — 濁沢出合(14:05~15) — 三の沢橋(14:35)

唐沢隊と合流。

東沢には良い道があるという事を聞いていたが集中豪雨や台風の影響らしく所々にかげ崩れや倒木がみられ大きなザックを背負ってぼつらい行程だった。道は左岸の中腹を通っており南餓鬼から出ている大きな尾根の末立端の大きなガレのあたりをぬかけて沢に下降している。そこからはケルンに導かれて行くと立派な道に出る。途中に小屋が一つと一の沢の出合にボロ小屋があった。

東沢乗越には小屋の跡と思われるものがあり、そこにテントを張れるし、風はほとんど吹かないのでテント場としてはいいのだが、水は20分以上も下らなければ得られないという不便がある。水さえあれば快適なテント地である。

根元念図



霞沢隊 L. 主計. 西郡. 田中. 貞野

1961. 10.30 - 11.2

10.30 曇 松本 - 上高地 - 横尾 - 蝶ヶ岳ヒュッテ

横尾 - 蝶ヶ岳間、ジグザグの登りは標識をつけながら進む。冬期にははがりのラッセルが予想される森林帯である

10.31. 晴、午後時々小雨

6.25 蝶ヶ岳ヒュッテ発、7.40 大滝山ヒュッテ着 - 8.20

1.00 徳本峠着

蝶ヶ - 大滝の複山稜には注意を要する。大滝から徳本の道は予想以上に良く、尾根から穂高側 50m 程下進して、いま問題は雪が徳本近くになると少く注意を要する。夕日は余計な程良かった。この尾根はブッシュの心配はなかったが、おそろしい森林帯で辛いラッセルが予想される

11.1 晴 6.25 徳本峠発 - 霜月山(仮称)着 7.30 - 8.10

同発 - 12.15 霜月山からの尾根と霞沢の尾根のジャンクション - 12.40 全発 - 2.40 霞沢岳幕営

徳本峠から霜月山までは予想もなかった程のおそろしい道が、この尾根の上高地側をジグザグに歩いていく。この道の入口と霜月山から霞沢に至る尾根のジャンクションの発見に注意を要する程度である。霜月山は山頂も明らかでない程高い。上まで森林帯の山で、ここから霞沢への尾根の始めを我々の北側を巻いたのが尾根通しの道もある模様だった。

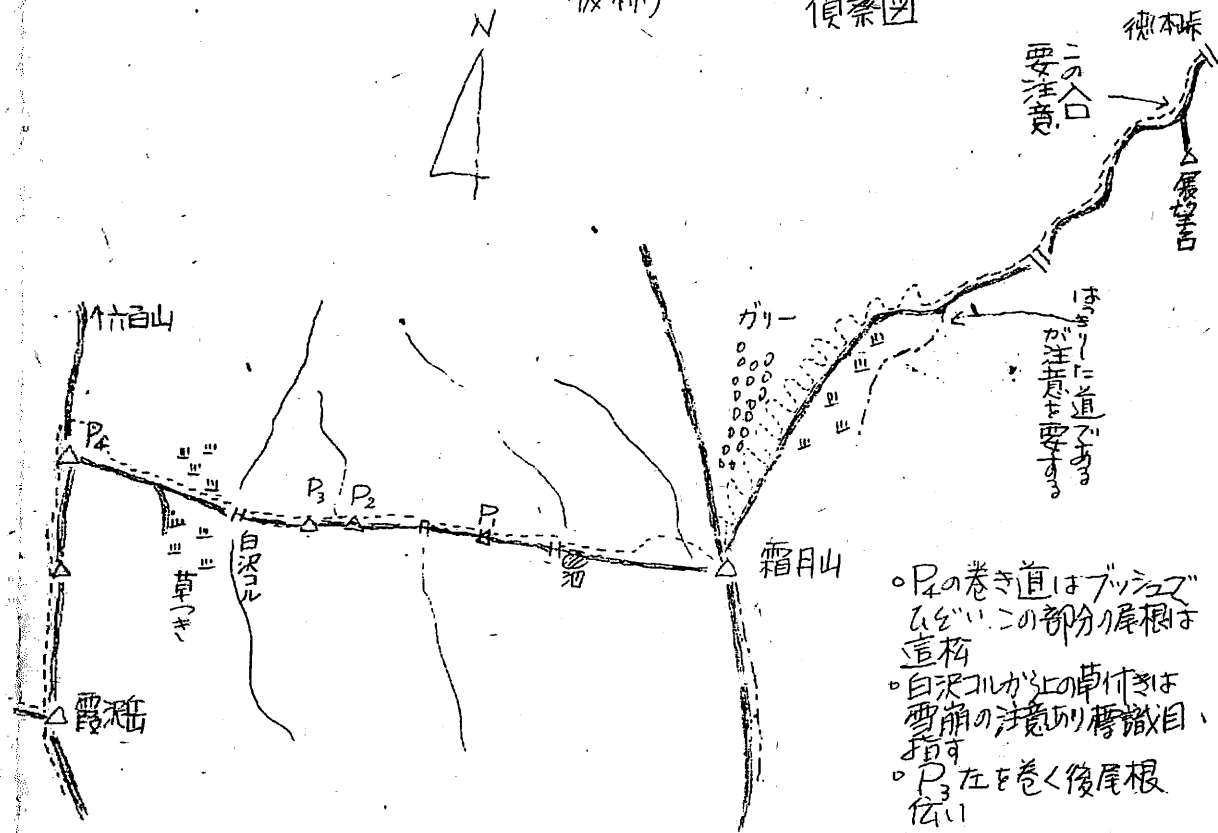
11.2. 晴

5.50 霞沢岳幕営地発

主計. 田中は霞沢岳から沢渡方面に伸びる尾根を下降し、発電所のパイプライン沿いに山吹トンネル付近に降り立つべく、又西郡. 貞野は霞沢から東に伸びる大正池取入口付近に降りている尾根を下降すべく出発した。

徳本峠 - 霜月山 - 霞沢岳
(仮称)

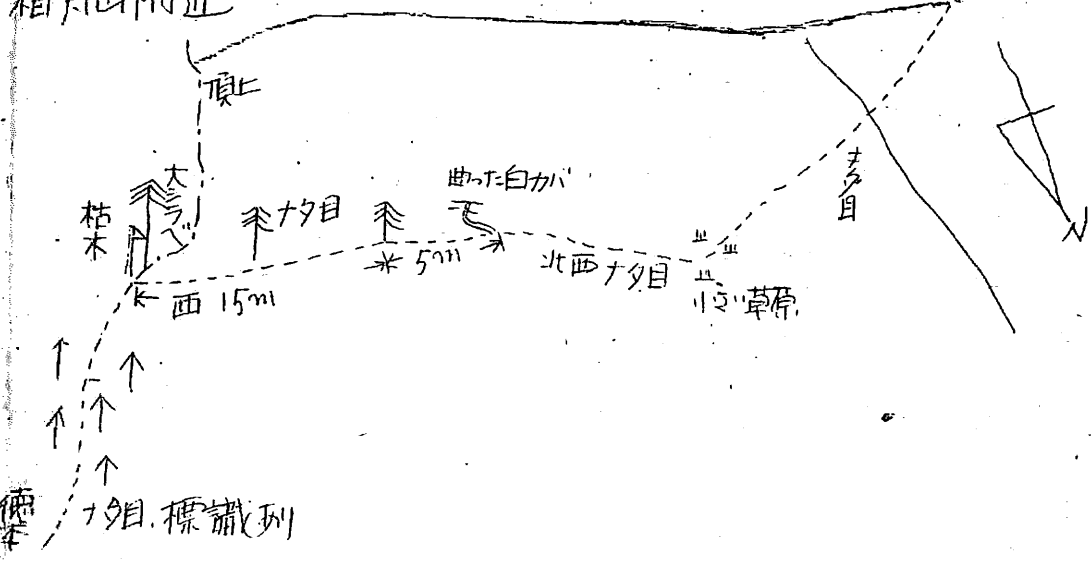
偵察図



- P₂の巻き道はブッシュでいっぱいこの部分の尾根は遠く
- 白沢コルからの草付きは雪崩の注意あり標識目印す
- P₃を左に巻く後尾根は広い

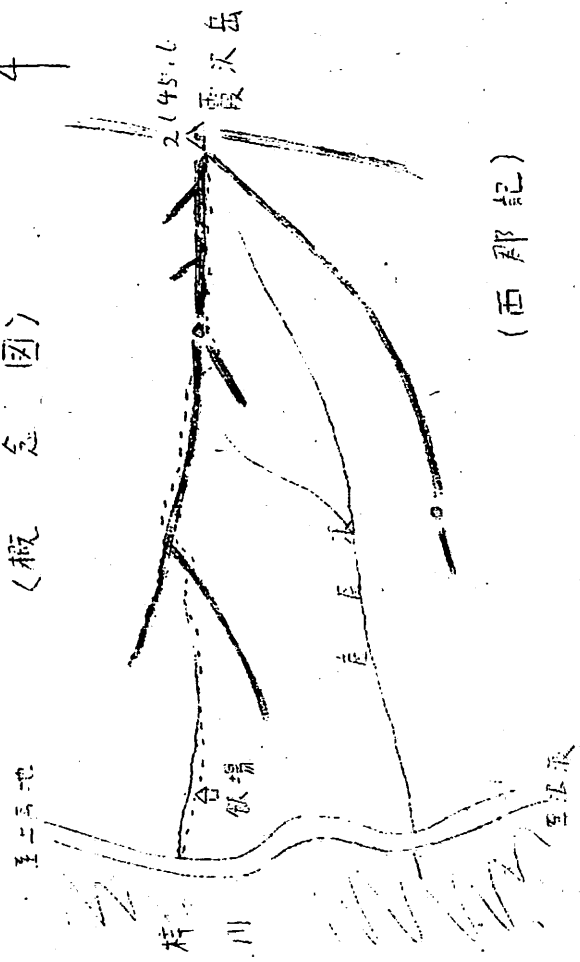
- 展望台への分岐点にはこの登りが始まる第一号の標識がある
- ジグザグの登りが始まる直前におおききには道が左に分れており標識に注意すべし
- ジグザグの道は森林帯の中に入り曲り目ごとにナタ目がある
- 池とP₁はかり急

霜月山附近



N 4

概念図

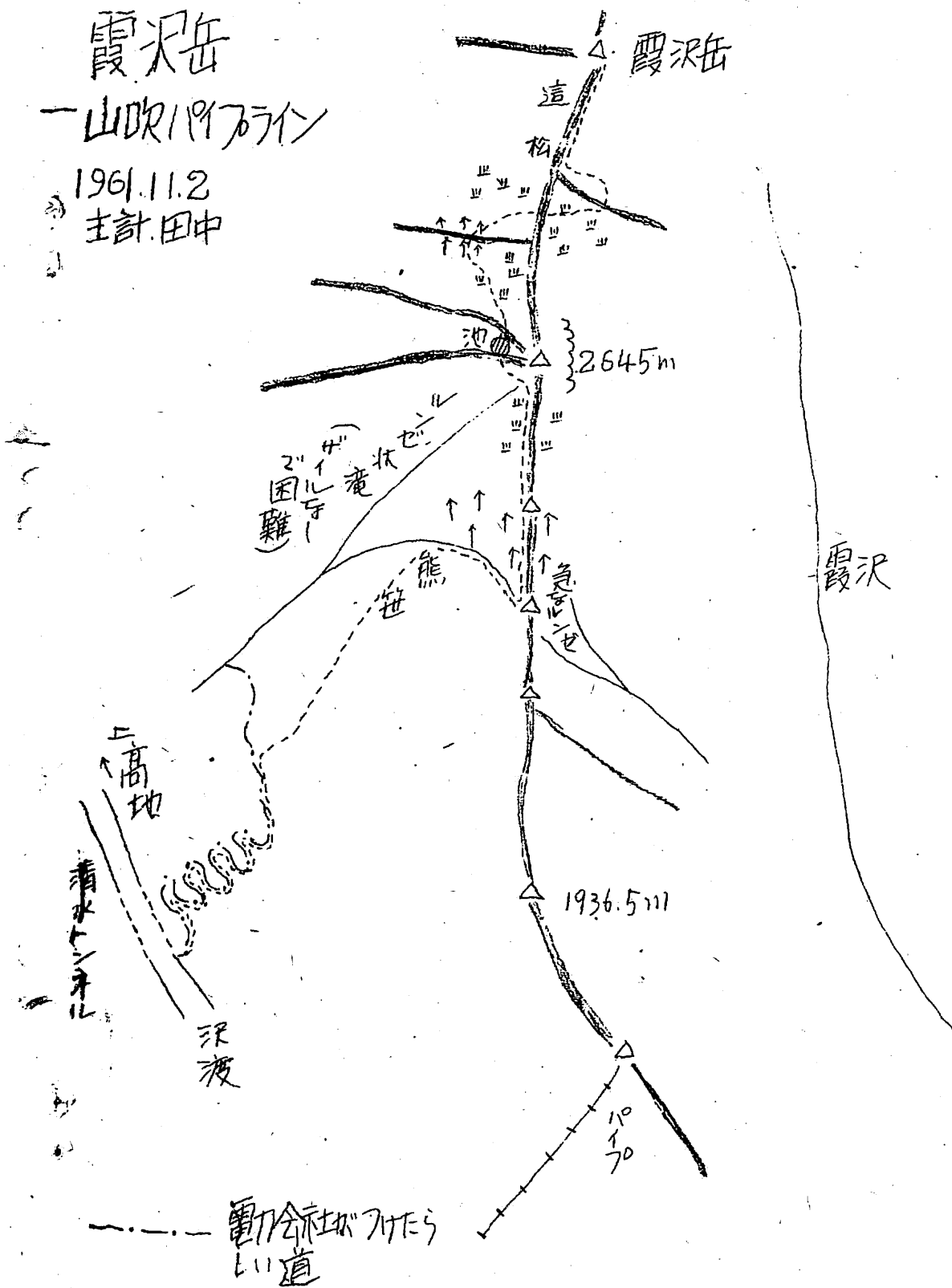


(西郡記)

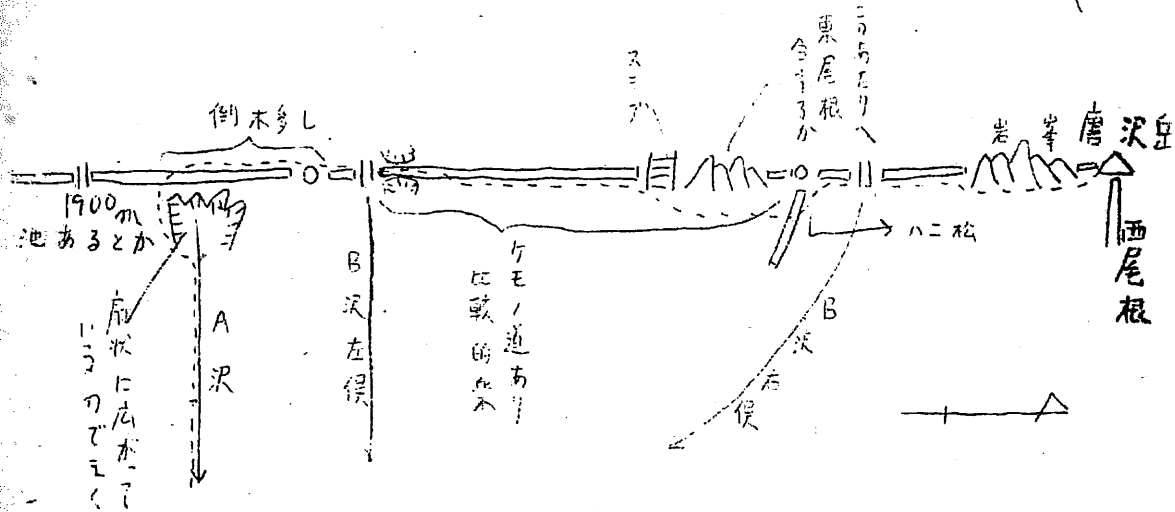
12.45 - 1.00 簡筆多り、食が
 二の沢にはおが、遠くは
 かがで、おが、大は肉題
 程は、おが、差、最リ
 は、おが、た。江
 1.45 飯場着

霞沢岳
—山吹1970ライン

1961.11.2
主計.田中



唐次岳北尾根概念図



< 偵察行をおわって >

- 11月上旬には珍らしい無雪と比較的好天にめぐまれたので、はじめの目的を完全に遂行できた事は誠に幸ばしい。
- 各個所の問題又は報告者からくはしい報告がめったので省くが、これによりルートはほぼ完全に確認された。
- 1) 唐次岳へは西尾根より200mの谷より取付く事。取付は一の沢、倒木の尾根、頂上迄は2つの前夜 Camp の事。
 - 2) 唐次岳、岩峯、かき岳向の尾根は複雑で、問題個所の多し事。唐次岳よりの下りは明のまゝであるが、冬も通れるであろう事。
 - 3) 北燕の岩峯は可能をかきりさける事。しかし雪崩の危険のある時は岩峯上を通過する事。
 - 4) 唐次岳よりの下りは五池の下手への尾根に取る事。こゝにも一ヶ所子取の岩峯があるが、冬期にも通りうるであろう事。

以上が偵察行により判明した。1, 2ヶ所の不明個所も短距離であり冬にも通りうるを思う。故にこの山合より帰る等しく感じた事は、意外に基が太く、色々本面で困難が予想される事だ。冬に故冬の合宿には細心の注意と、fight が要求されるであろう。最後にこのようにほぼ完全に近いまでの偵察を行、冬事に備えておく。少くとも計画はスムーズに進行させるため(これは成功への道だ)には必要である。この一歩を踏み出す。